

## 文化・芸術



1993年11月13日撮影。大川美術館庭園から見上げた空にある新井の布。左が大旗。現在は吹き抜けでご覧いただけます

### 「大旗」

1982年、シルク、ナイロンほか  
713・0<sup>cm</sup>×347・6<sup>cm</sup>

新井淳一（1932～2017年）

新井淳一は1932年、桐生で織物業を営む家の長男として生まれました。世界的なテキスタイルプランナーとして活躍し「未だ見ぬ布の創造」を追い求めました。糸の開発から織り、染色、加工まで、各分野の人々と連携しながら多彩な布のテクスチャーを生み出し、70年代以降、山本寛斎や三宅一生ら日本を代表するデザイナーのコレクションに提供しています。

木綿の強撚糸（ねんし）を使って模様を立体的に浮き出させる織り技法の一種「布目柄」の展開をはじめ、金銀糸織物の金属部分をアルカリで溶かす「メルトオフ」など、独創的な技法を多数開発しました。初代館長・大川栄二とは、当館開館当初から交友を続けました。

本作は、当館のイベントの際、シンボルとして屋外展示されました。天候や日の陰りなどにより表情を変えてはためくその雄大さに魅せられた大川は、新井に当館庭園と布とのコラボレーションを依頼し続けたのでした。

（小此木）

### 〈名画の扉〉

大川美術館コレクションから